



第22図 青城山における中国の地質家と三梨教授（右から3人目）、左から2人目が劉和甫教授、右から2人目が師開業教授。

た。一緒に酒を酌み交わし、同じ釜の飯を食い、お互いに胸襟をひらいて様ざまなことを話し合う機会があまりなかったわけである。未だ外国に対する警戒の念がつつよいのであろうか。学問の発展にとって、国際交流

はひじょうに重要な要素であるが、せっかく国際会議をひらきながら個人交流の道が半分とぎざれては、その効果も不十分なものになってしまうであろう。

中国の地質家は、日本にくらべて圧倒的に数が多いし、社会的地位も高い。また様ざまな分野で活動しているようである。中国の地質は、独特な発達史をもっているといわれている。このような地の利を生かし、自信をもって独自の発展をする日が一日も早くくることを願ってやまない。我われ日本の地質家も、その発展に常に注意をはらい、世界の地球科学界に大きく貢献するような学説を展開したいものである。

なお、国安君が北京市のタクシーの中に忘れた財布はその後見つけられ、日本へ送り返されてきたということである。

最後に、巡検でいろいろお世話になった中国地質大学の劉和甫教授、師開業教授（第22図）行動をともにしてお世話になった三梨昂氏、丸山茂徳氏、国安稔氏、原稿作成をお手伝いいただいた久保紀子氏に感謝したい。

最近中国で発見された新鉱床

岸本文男（元所員）

Fumio KISHIMOTO

首都鋼鉄公司 鉄鉱新鉱量増 5.5億 t

中国地質大学の李志忠・顧徳林ら北京・武漢両地の20名の教官は、多年にわたって河北省の遷安鉄鉱床区の地質構造の詳しい研究を続け、非常に多くの成果を得た。彼等の研究の結果にもとづいて探査が行われ、検証が試みられて、首都鋼鉄公司は新たに5.5億tの鉱量を獲得した。その研究テーマ「河北省遷安鉄鉱床区における先カンブリア紀の地質構造と鉄鉱床田の構造の研究」という論文は、5月13日に中国地質大学と首都鋼鉄公司の連合組織の専門家たちの審査を通過した。

河北省の遷安鉄鉱床群は首都鋼鉄公司の重要な鉄鉱供給基地で、首都鉄鋼コンビナートの生産と発展にとってこの上ない重要な価値を持っている。過去、多くの機関が何回も何回も調査研究してきたが、本鉄床区の地層区分、地質構造などの点でまだ意見の一致が得られていなかったし、鉄床区内の鉄体の形態と分布についてもはなはだ鮮明さを欠いていた。

李志忠・顧徳林ら20名の教官と年々100名近くの学生が10数年もの実地調査の過程で、岩石学・地球化学・地質図学・構造地層学・同位体年代学などの諸方法を総合する方法を用いて層序を確定し、300km²の範囲内の20近くの鉄床の地質学的資料を蓄積し、繰返し詳細に行った研究を基礎に複合褶曲という新たな観点を用いて鉄床地域の地質構造を論証し、鉄床と鉄体の形態と分布を説明し、さらに鉄床の予測のために正確・有効な理論的根拠を提供した。この研究項目の結果は、水廠、白馬山、柳河峪など6鉄床の探査で実証された。たとえば水廠鉄鉱床（鉄床区内での最大の鉄鉱床）の場合、彼等が出した結論にもとづいて探査が進められ、1億t近くも鉱量が増えた。彼等はこの項目の科学研究を進める中で作成した1/20,000の遷安鉄鉱床区地質図と同構造地質図は、その地区の地質調査・鉄床探査・鉄山開発にとつて重要な理論上の価値と実際上の意義を備えている。

丁総傳（中国地質報 1988.6.17）

誌 COFFI (Commission on Ore-Forming Fluids in Inclusions)* 及び FIR (Fluid Inclusion Research)* に掲載されたすべての文献が入力される予定である。今回は PACROFI II のアブストラクト集を入力した結果についてのデモンストレーションがあった。流体包有物の研究は近年たいへん盛んになってきており第1図に示されているように抄録誌への掲載件数はうなぎ登りとなっている。勿論 GEOREF 等の市販のデータベースにも抄録誌にある流体包有物の文献の多くは入力されているがキーワードの選択が必ずしも十分とはいえない。FIRRIは この不備を補いあくまでも研究者の立場に立つことを目指している。

6. 今後の予定

集会の終りに今後の PACROFI のもち方等について若干の討論があった。PACROFI は当初2年おきにヨーロッパで開かれる ECRFI の非開催年にもつことを計画していたが現状では開催年が重なってしまっている。今年の ECRFI は4月にロンドンで開催となっ

ている。そこで次の PACROFI を来年1990年に開くことでこの調整が計られることになった。今回は5月20日—23日にカナダのトロント大学で Spooner 氏がホストとなって準備される。さらにその次は1992年にデンバーの Burruss 氏 (USGS) のところで開かれることが有力になっている。またニュースレターも企画されることになり当面ウィスコンシン大学の Brown 氏が準備にあたることになった。さらに流体包有物の雑誌の発行についても議論されたがどこの大学でも図書の予算は限られており新しい雑誌を購読するには何か1つ購読をやめなければならないような実状においてはあまり好ましくないという意見が大勢を占め新しい雑誌は当面見送られることになった。第1回の PACROFI (1987年) のいくつかの論文は1988年の *Geochimica et Cosmochimica Acta* の特集号に掲載されたが今回の発表についても GCA に特集号を依頼することになった。ちなみに ECRFI で発表された研究は *Bulletin de Minéralogie Chemical Geology* といったヨーロッパで発行されている雑誌に特集号としてまとめられている。

脚注 * COFFI は流体包有物抄録誌の第1巻から17巻までの名称で第18巻以降は FIR になっている。

最近中国で発見された新鉱床

岸本文男 (元所員)

Fumio KISHIMOTO

贛南地方での貴金属鉱床探査の展望

「世界のタングステンの都」の名がある江西省の贛南地域は金と銀を主体とする貴金属資源の探査に有望な状況を次々に現してきてすでに20ばかりの山金砂金そして銀—多金属の露頭が発見されている。その発見は江西省地質鉱産局の贛南地質調査大隊が力量(生産力規格)に即した地質調査・鉱床探査配置を堅持し地質調査・鉱床探査技術の複合効果を発揮した結果である。

数年来贛南地質調査大隊は地質調査・鉱床探査の戦略の重点を国民経済建設の緊急な需要に応えることにし、生産力の発展と社会的な経済効果を早く生み出すことができる金・銀などの貴金属および錫・稀土類などの鉱種に置き、鉱床探査の期間と周期を思いきって圧縮し長期計画を見直し限りある探査費をぎりぎりまで切り詰めて探査区域を増やし1986年に最初の金鉱床の中間的な精査報告を提出した後全面的に貴金属鉱床の探査を展開して経験を積み重ねていった。そして本年7月末には9鉱区で計画されていた54本の探査試錐をやりとげてその大部分の試錐点で貴金属鉱体に着脈させることができた。

第9号鉱区は同隊が今年新たに探査対象に組入れた鉱区であるが彼等はその春の長雨夏の猛暑などに耐えずわずか1ヶ月という準備期間しかなかった中で探査事業を全面的に展開し1号試錐井を計画して掘進し次々に7層の鉱体を把握した。そのもっとも厚いものは厚さが2.7mに達しコアの化学分析の結果によると含金品位は最低可採品位を越え含銀品位は最低可採品位のほぼ3倍であった。第4号鉱区は高品位錫鉱床の精査区域であるが今年に入って掘進した3本の探査試錐によるとそれぞれ厚さが10.6m 11.8m 12.2mの鉱体に達して錫の鉱量をさらに増やした。

そのほか同隊は鉱床探査技術の多面的な機能を注意深く発揮し地球物理探査法と地化学探査法を用いて金・銀を探索して本年その3区域の異常区において精査を実施しその中の1区で2条の含金石英脈際脈帯を発見した。その細脈の大部分は幅が80—100mmで地表と探鉱坑道内での採取した鉱石の化学分析の結果によると含金品位はいずれも可採最低品位をはるかに越え最高のもは可採最低品位の10倍となっている。

李徳銓 (中国地質報 1988.9.9)